
物語と恋

Sorairo 光

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

物語と恋

【Nコード】

N8395I

【作者名】

Sorairo 光

【あらすじ】

もしかして私（高瀬 莉伊南は）、本の物語の中に巻き込まれちゃった！？

急展開な物語、いったいこの先、どうなるの！？

私は無事、元の世界に戻るの！？

1*「あのお……私さっそく何かまずいことでもしちゃいましたか？」

内容は少しファンタジーが入っています。

1*「あのお…………私さっそく何かまずいことでもしちゃいましたか？」

―ある国がありました。今はただの物語でしかありませんが……
・とても栄えた立派な国の城に住む姫、テアーヌ・ロビアンス姫
と発展途中の国の城に住むテレツケン・セントアー王子がいました。
さて、二人は…………？」

ロビアンス家とセントアー家は今、互いに争い会っていました。

テアーヌ姫は何とかして争いではなく平和を結ぼうとします。

ですが、セントアー家が平和条約としておくりつけてくる内容はいつもロビアンス家にとって不利なものばかりでした。

たとえば、栄えているロビアンス家の都市の一部をセントアー家の領地にすることであったり、テアーヌ姫をテレツケン王子の嫁にむかえ、ロビアンスの城を守る外壁を取ることで会ったりと、一方的な内容、それもロビアンス家ばかりが不利になる内容だったので。今、いつセントアー家に狙われるかわからない状態のロビアンスの国と城はいつも見張りがおり、姫は窓から顔などもつてのほか、手の指さえ出すことは許されませんでした。

「はあ…………テレツケン王子とはどのようなお方なのでしょう…………私、ほとほと不安ですわ…………。」

姫には次期にロビアンス家が怒り出し、セントアー家と争いになることは目に見えていたのです。

条件だけでもピリピリしているのに、平和条約を結ぶなど、“滑稽”だ…………と。

「こちらから怒り出して、セントアー家に戦争を仕掛けることがセントアー家の目的なのだとしたら…………セントアー家の思惑どおりになってしまいますわ。それに、あちらはまだ発展途中の国…………負けてもいくらでもやり直すことが出来る。でも、こちらはそのようではない。一度この国や歴史を奪ったらそれはもう二度と

帰ってこない……。国はそれだけ安定しているけど、知恵は多くても力は弱い。あちらは知恵はあまりなくても力とはとても強く強い……。互いの弱点をどう隠すか、そしてどう利用するかですわね……。安定とはなんともろいものなのでしょうか。……。

そう、セントアーの強みはそこでした。

まだまだ発展途中ということは弱みがあり握れないのと同時に、いくらでもやり直せる。

そんな中で固定されたロビアンス家は不利な状況下にあつたのです。そこで姫は、決意されました。

しばらく森林の中のロビアンス家の血を少しばかり引くものの所に遊びに行こうと。

もちろん2〜3日で帰ってくる気はありません。

もつと長旅です。

こっそり良くのだから馬車などは使えません。

昼下がり、警備がほんの少しだけ緩む時間に白昼堂々城を後にすることを決めました。

そこで幕が一度降りる。

私は何をしてるんだろう……。

ただの読書好きな女の子のはずだった。

なのに、なんで演劇をやってるんだろう……。

理由は分かってる。

理由は、押し込められて出るにでられないから。

どうしても演劇部員が足りなくて押し込められた私、
高瀬 莉伊南
本命は読書部。

こっちは幽霊部員。

だけど、主役の子が本番を前にして風邪で駄目なんて……。
やっぱりなんで私ここについて思うじゃない……？

でも、まあ幽霊部員ってこともあって、たくさんあった台詞はかなり省かれ、ほとんど放送でナレーションが入る。

私ってテアーヌ姫だね。

閉じ込められて、私に有利なことって何一つないっていう……。

……なんか、あたりがざわついている。

「あのお……私さっそく何かまずいことでもしちゃいましたか？」

「あ、いや、なんでもないよ。もうすこしやってみないとわかんないけど、今まで演技とかやったことある？」

「いいえ？」

あるわけないじゃん。

だって、そんな自信、どこにもないもん。

「一度も？」

「はい。」

英語ならここでもN.O.だけど、カンニング用紙があるから台詞を忘れても大丈夫だし。

結構ラク。

「次の2幕目いける？」

「はい。」

台詞覚える必要もあまりないし。

「よし！第二幕準備！」

「準備終わってます！」

どこからか聞こえた声。

「じゃあ、莉伊南ちゃんと小枝木君と由里ちゃん、用意して！」

「はい。」

三人の声が重なった。

2*「まあ……笑えませんわね。こんな森深く、それもセントアールの地

私、莉伊南は主役、テアー又姫。

それも急遽決まった即席。

小枝木君はテレッケン王子役。

由里ちゃんは姫の友達役。

そしてまた放送ナレーションが流れ出す。

いよいよ姫が昼下がりに出ることを決めました。

姫はメモ書きを残しておきました。

自分はセントアーにつかまったわけではないことを証明するためです。

でももちろん居場所は書きません。早めに出ないと紅茶を運んでくるお茶係のメイドが来てしまいます。

姫！急いで！！

「あら、庶民の服って、だぼつとしていても着やすいのね。あら、もうこんな時間……急がなきゃ……」

そうして姫はドレスからシンプルなものに着替えました。

それは姫たちのような貴族には下着や寝巻きのような格好でした。城の中を急ぎ足で過ぎていく姫。

「まあ、人目をしのいで歩くってとってもスリリングね。」

そして姫は見事に城を抜け出すことに成功しました。

その後すぐ、お茶とお菓子を運んできたメイドが部屋に姫がいないことに気づき、城内が大騒ぎになったことは言うまでもありません。ですが、姫もいろいろと混乱していました。

栄えていると思ったロビアンスの国の町、姫だつて町が楽しいことばかりだとは思っていませんでした。

でも、自分よりずっと小さな女の子が道端で自分に物乞いをしてきたり、身を切り売りして売春をしている子などを見ると、姫はただひたすらに誤り続けることしか出来ませんでした。

自分は平和のためにいろんなことをしてきたつもりだったと自信をなくす姫、森林の奥深くにいる姫のお友達、セリアンのところについたときにはすっかり落ち込んでいました。

「ごきげんよう。セリアン。」

「テアーヌ！？ちょ、ま、中に入って！」

「お邪魔しますわ。」

「あんた、姫様だろう！？大体今は、セントアーとの戦いで外には出してもらえないんじゃないか……。」

「あらセリアン、あなただつてセントアーの血を引いているのよ？立派なお姫様じゃない。」

「そうじゃなくて！！」

「ええそうよ、セントアーとはまだ平和条約が結べていないの。お父様はこんな条約なら結ばなくて結構！つて怒っていらつしゃって……いつまであのお父様が持つか……。」

「あつちやあー！あんたのお父さん国王だからね。邪険に扱われたと思つたらキレるよな。」

「そう……それで今回はお忍びつてわけなのよ。」

「そのお姫様がこんなところにいていいのか？」

「でも……いろいろ考えたいのよ……一人で城の中では一人になることはなかなか出来ないわ。だいたい、窮屈すぎるのよ。それになんてお父様はあんなにもセリアンを嫌うのかしら。」

「それはあたしが正式なロビアンス家の血ではないからだよ。ほら、あんたと違ってあたしはがさつだし、いろいろと問題があるんだ。」

「そんなことないわ。ロビアンス家の一族の中で黒い髪の毛は聞いたことないけど、とっても綺麗よ？ふわっとカールしてて、肌が少し黒いのもまた似合っているのよね。」

そんなこんなで色々な話をしてセリアンとテアー又はすごしていました。

森林の中の生活にもだいぶん慣れてテアー又姫は丘の上にいました。そこには一人の男性がいて、木下で本を読んでいた。

姫はすぐ引き返そうとしましたが、呼び止められました。

「そこのお方。」

「あ、あの……おじゃまするつもりはなかったのですが……」

「ココの近くに住むところがおありですか？」

「え、ええ、ありますわ。」

「あなたは平民より身分が高いご様子で。ここらはロビアンスの領地では？」

「え……？そんな、私はただの凡人ですわ。ええ、ここはたしかにロビアンスの領地です。ところであなた様はどちらからやってこられたのですか？」

「セントアー。」

「まあ！セントアーですよ！？」

「やはりこちらにも伝わっているんですね。セントアーがロビアン스에 전쟁을……」

「え、ええ。」

「でも私は戦争は好きではありません。少しばかりロビアンスを見てみたいのですが、そちらにおとまりしてもよろしいでしょうか？」

姫には戦争が嫌いというセントアーの男性は悪い人には見えませんでした。

落ち着いていて、優しそうな男性に名を聞くことを忘れて、テアー
又姫は自分はシャナだと名乗り、男性は「ルイス」と名乗りました。
またそーやってすぐ人のこと信用するー！そんなんだからあまいん
だよ！と後にセリアンからこってりしぼられてしまいますが・・・
・二人ともルイスにすぐなじみ、ルイスもすぐになじみました。
ある日、二人で焚き木拾いに行くとき王子は言いました。

ライトが切り替わり、私たちのほうを向くと、とてもまぶしくて、
ついつい手を顔のあたりにかざしたくなるのを我慢して小枝木君を
見た。

「シャナ、戦争など無ければいいと思うときはないかい？」

「もちろんありますわ。戦争など無意味です。破壊しか出来ないも
のに自由を奪われていく命など、私は見たくはありませんもの。」

「そう、それにこの空を舞っている鳥たちも木々も失われてしまう。」

「

「でも、私たちの力ではどうにもなりませんものね・・・」

「そうだね。シャナ、君は本当に落ち付いていて物事をよく判断で
きる。とてもものびのびとしていて自由だね。うわさに聞くテアー又
姫みたいだ。」

「そ、そんなことはありませんわ。私とテアー又姫とでは天地の差
があるところか天地がひっくり返よてしまいますわよ。」

「はは、そんなことはない。ねえシャナ、もしもね、もしもだよ。」

私がテレッケン・セントアーだと言ったらどうする？」

「まあ・・・笑えませんか。こんな森深く、それもセント
アーの地方からルイス、あなたが来たというのなら、ありえないこ
とではありませんもの・・・」

ライトが落ちでナレーションが入る。

姫はこのとき、この男性がテレッケンではないことを祈りました。
もしもテレッケンであったなら、芽生え始めた自分の気持ちはどう
したらいいのかと。

そして、自分がテアーヌ・ロビアンスだと名乗ったときにはルイスはどういう反応をするのだろうか……と。

ですが、ルイスがただものではないと姫はうすうす気づいていました。

そんな中テレツケン王子の名が出てきたのですから、ルイスがテレツケンであることに90%の確信を得ました。

それでも姫は祈りました。

“どうかルイスがテレツケンではありませんように”と。

「はい第二幕終了ー!!」

「ふいー。」

齒が浮くような台詞を本の中ではさらっと言っちゃうけど、現実で聞くと笑いそうになっちゃってだめだな……。

このストーリーの大まかなあらすじはルイスはやはりテレツケンでテレツケンはシャナに恋をしていた。

シャナはテレツケンの前から姿を消し、テアーヌとして城に戻るとテレツケンが丸腰で城に来ることが決まり、中庭で二人が話をしている間にテレツケンが何者かにより殺されてしまう。

そのときのテアーヌの台詞が「ああ、テレツケン。嫌です。私をおいていかないでください。こんなことになってしまふのならいっそのこと国も地位も名誉も捨ててあなたにこの想いを伝えてしまえばよかった……!!」、つまりバットエンドの物語である。

この本はずいぶん昔に読んだ本だ。

ふつと下を見るとその本が落ちていた。

あれ？今までこんなところにこの本あったっけ？と思って思わず手を触れると訳のわからないことが起きてドサツと尻餅をついた。

3*「い、いけません！そんなこと……出来るはずありませんわ……」

「ったあ……」

「ここどこよ？」

「姫、ご無事ですか？」

「姫？誰が？私が？」

すると私の顔を覗き込んだ人がくるりと違う方向を向き、叫んだ。

「ドクター！ドクター！！姫様が、打ちどころが悪かったみたいですよわ！」

え？どうなってるの？

ファンタジーとかである、ピカーどぴゅー、ドサッってやつ？

えっと、だから本の世界に飛んじやった……みたいな？

って、ことはバッドエンド小説の主人公、テアー又姫に私がなっちゃったってこと！？

やーだあああああああ！！

と、とにかく落ち着け私。

「やだ、ごめんなさいね。わたくし私なら平気ですよ？ほら、このとおり。」

「
立ち上がろうとするとコルセットの重さときつさにふらつきそうになった。」

「姫様！本当に大丈夫なんですの？」

「ええ、少しふらついただけですもの。」

ここはいつたいいつなのだろう。

テレケンとは出会ってないのだろうか。

手紙は送られてきてないのだろうか。

「ねえ、最近おかしいことは起こっていないかしら？ロビアンスがゆずられていたりとかはしないわよね……」

「姫様、いつそれを……」

ふーん。手紙が来た初期って訳なのね。

「やっぱりそうなのね。それで、相手はなんと？」

「く、詳しいことは聞いておりません。ただ、脅迫のような手紙が届いたと……王様がたいそうお怒りになられたとかで……私一同は姫様には言わないようにと口止めをされておりました。申し訳ございません、姫様。」

「いいのよ、それよりコルセットが少しいつもよりきついのではないかしら。」

「いいえ、いつもどおりでございますよ。さあ、姫様、先生がお待ちになっておられますよ。」

そして夜10時過ぎまでみっちりレッスンをされ、終わった頃にはスタばろだった。

おなかが気持ち悪い……ウエストが……自分の頭と同じくらいしかない……。

こんなんじゃ、体の形だつてかわつちゃうよ。でも、もう一つやらなくてはいけないことが。

メイドに尋ねると扉をノックして入った。

その人は頭を抱えてうなっていた。

「……お父様。」

「おお、テアー又か。」

「隠さないで。私、もう知っているんです。ロビアンスが危機に瀕していることくらい。」

「それをどこから!!」

「私がメイドをわなにかけました。」

「そうか……あれほど言うなといったのに。」

「お父様、私、戦争は反対です!いくらお父様でも戦争をなさるというのなら私は賛成いたしかねます!!」

「そういうと思ったよ。われわれももう少し考えてみるがね、いざとなれば仕方なくなるだろう。そのときにお前が動いてしまったら困るのだよ。」

そして日に日に警備が厳しくなっていた。

やばい、これは相当怒ってる。

もう爆発寸前だ。

早くテアーヌを旅立たせないと。

そして本に書いてあった通りにしたけど、本の中みたいに簡単なんかじゃなかった。

これをスリリングとか言ってるテアーヌってスゴイ。

結構肝が据わったお姫様だったのかも。

城を抜けると森へと急いだ。

よってくるこじきに心をとめてる暇なんかなかった。

一国もこの国を早く抜けなければつかまってしまう。

えーん、何で私がこんな目にー？

とか思ってたながらどつかでレッツケンがどんな人か少し楽しみだった。

今まで文字でしか表現されなかった人物が目に移るんだ。

バッドエンドだけど！！

セリアンに出会々と私のイメージどうりの人で、本と同じことを言
って私をかくまってくれた。

でも、変なことが起こってる。

どうしてテアーヌの顔が以前の私のまんまなんだろう。

黒くて長かった髪は金髪に変わり、肌は白くなっても顔つきは昔の
私のまま。

変だなあ……………。

ふつとなれた頃に丘の上に行くとレッツケンが居た。

あれ？

今日出会う日だったんだ……………？

ああ、一回戻ろう。

「そこのお方。」

えっと、確かせりふが……………。

「あ、あの……………おじゃまするつもりはなかったのですが……………。」

「ココの近くに住むところがありますか？」

「え、ええ、ありますわ。」

「あなたは平民より身分が高いご様子で。ここらはロビアンスの領地では？」

「え．．．．．？そんな、私はただの凡人ですわ。ええ、ここはたしかにロビアンスの領地です。ところであなた様はどちらからやってこられたのですか？」

「セントアー。」

「まあ！セントアーですよ！？」

「やはりこちらにも伝わっているんですね。セントアーがロビアン스에 戦争を．．．．．。」

「ええ。よく。」

「そうですね。」

そして大体本と同じように話は進み、なんとなくテアーヌがルイスにほれた理由が分かった。

やさしく、平和主義で、肉食でもなく草食系男子ではないってことだ。

その場の雰囲気を変えてしまう。

なんとなく、空気でシャナがすきなんだろうと伝わってくる。

って、なんでときどきしてんの？私じゃないんだよ？

惚れたのはテアーヌであって私じゃないのに、なんで私がこんな気持ちになんなきゃいけないの．．．．．。

見えてる最後はもう決まってる。

見えてる世界は死しなくて。

なんで、こんな気持ちになるんだろう。

私、変だ。

絶対変だ。

ある日、私とルイスは再び丘に登った。

そして物語りどおりにはなしていると物語の台詞ではないことをルイスが口に始めた。

「君はとても、聡明で美しいね。」

私が？顔は私であって美女のテアー又なんかじゃないのに？

「そんなばかな！！・・・と、失礼いたしました。」

「もし、私がテレツケンだと思ったら、シャナ、君はどうする？」

「わ、笑えせんわね。」

「君は本当に平民なのかい？」

「ええ。」

どうしてこんなこと聞くんだろう。

こんなシーンあったかな？

「私はね、シャナ、君が好きなんだ。」

え？ま、待つて、いきなりすぎるよ！だって私はシャナでもなければテアー又でもないのに・・・。

許されないよ。

こんなこと。

私も、テレツケンが・・・好きかもしれない・・・なんて。

「一緒にセントアーにこないかい？」

「い、いけません！そんなこと・・・出来るはずありませんわ・・・。」

そうだよ。私は莉伊南であって、シャナでもなければテアー又でもない、この世界の住人じゃないんだから。

4*「テレッケン!？」

「どうして？」

「私は……私は、あなたに好かれる資格など無いのです。

ああ、なんと言ったらよいものか……。一日だけ時間をくだ
さいませんか。」

「私が嫌いですか？シャナ。」

「嫌いではありません……。断じてそれはありません。で
も、どうしたらよいか……。どうかお願いします。時間をくだ
さい。」

「……。分かりました、待ちましょう。あなたが夜に逃げ出
そうとしなければ。」

ああ、やっぱり自分の気持ちをシャナに伝えたときから確信してい
たんだ。

テレッケンはシャナがテアーヌであると。

「そ、そんなことしませんわ。」

思考が読まれてる。

でも、どうしよう。

帰らなくちゃ。

話を変えちゃったら私が今度はちゃんと地球に帰れるか分からなく
なっちゃうんだから。

それに、私はテレッケンのことなんてなんとも……。なんと
も……。想ってない……。はず……。なんだか
ら。

行かなくちゃダメよ。

逃げなくちゃ。

早く。早く、とらわれてしまう前に。

夜になって外をのぞくとテレッケンが見回りをしていた。
どうして？

この日、テレツケンとは安らかに眠りに付いたはず。

テアー又はテレツケンの寝顔を眺め、小さく「さようなら」とつぶやいてからセリアンに「本当にそれでいいのか？」と見送られて玄関から城に戻るはずなのに。

これは、少々無理してでも行かなくちゃ行けないみたいね。

そろりと窓から抜け出し、テレツケンが過ぎ去った道を走っていく。ごめんなさい、ごめんなさい。

あなたの気持ちを“私は”受け取ることが出来ないの。

テアー又だったらまだ良かったかもしれない。

でも、私はテアー又なんかじゃないの。

どうか、ああ、出来るならどうか早く元の世界に私を返して。

「お父様！」

「おおテアー又！こんのバカ娘が！！」

「お怒りはあとでお受けいたします！それより、セントアー家にテレツケン王子がいらつしやらないようです！もしこちらが人質にとつたとされ、戦争を吹っかけられても困るのはこちらですわ！」

「それはまことか！？」

「ええ！」

そうしてそれなりにまだ平和を維持していた頃、テレツケンがテアー又に丸腰で会いたいという用件が来た。

「会いたくありませんわ……お父様。でも、戦争はしたくありません。」

「あちらは丸腰なのだぞ？それに今までのイメージとはだいぶ違う。」

「ええ、知っています……。」

知っているからダメなの。

会いたくないの。

会ってしまったら、テレツケンは死んでしまう。

私一人では物語を変えられない。

変えちゃいけないし、もどれなくなるかもしれない。

戻りたくなくなるかもしれない。

だからダメなの。

会いたくない。

「どうする？」

「わかり………ました。」

ダメだ。

会わなくちゃ、殺さなくちゃ、私は戻らなくちゃいけないんだから。そしてテレッケン是不かな顔の私をみて人払いをするために庭にいくと私は物語上、テレッケンが立っていた位置にたつた。

見殺しになんて。出来ないから。

「やはりテアー又だつたんだね。」

「あなたこそ。」

「私はすべてをすててもかまわないよ。」

「………あなたが好きなのは私ではありませんわ。ええ、私ではないのです。」

「何を言っているんですか？」

「私は………テアー又でもシャナでもないのです。」

「そんなの知らない。私の前にはあなたが居るのに！」

銃が引かれる音が聞こえる。

銃を握っていたのは貴族への反乱軍だつた。

打たれるのは別にテレッケンでなくてもかまわなかつた。

なのに物語ではテレッケンが打たれ、死んだ。

でも、打たれた音で護衛の人たちが駆けつけ反乱軍はあつという間に沈静し、つかまつてしまうのである。

なら、打たれるのは私であつてもかまわないはずだ。

カチンつと音と同時に「危ない！！」というテレッケンの声が聞こえ、気づけば出来事は一瞬で、私は尻餅をつき、テレッケンは倒れこみ、護衛の人たちが犯人を見つけ出す。

「う………そ………テレッケン？ いや………いやあああああ！！！」

テレツケンを抱きかかえ、ボロボロ涙をこぼす。

「……う。い、痛い……。テアー又姫……。痛いです。」

「！？ぶ、無事でしたの？」

「ええ、でもまさか姫がここまで私を好いてくれていたとは知りませんでした。」

「ば、バカなことを言わないでください。」

「では、その目から流れているものは何ですか？」
弱弱しくテレツケンも笑った。

「涙……。ですわ。」

「あなたが、無事でよかった。」

私の顔に触れる。

「や、やめてください。私はテアー又でなければシャナでもないのです。あなたを受け入れるわけには。」

「何故拒むのです。私たちはお互いを求めています。それなのに何故？」

「……。お話いたしました。私は、信じられないでしょうが、この世界の人間ではありません。この世界は一冊の本の中でその本を手にとった私がここになぜか来てしまったのです。」

そして本を手取るまでの一部始終を話した。

「……。ですから、私は高瀬莉伊南という人間であって、本来、ここに居てはならない人間なのです。」

だんだんと体が透けてきた。

「そんな……。バカな……。」

「さよならが近いみたいですね。私もあなたが……。無事で……。良かった……。」

そして気づけば涙を流しながら本を持って座り込んでいた。

「莉伊南ちゃん？3幕初めていいかな？」

「え？あ！はい！今、何時だろ？」

時計をみるとぜんぜん時間は進んでいなかった。

「じゃあ小枝木君、用意してー。」

「はい。」

え？この声って……。

振り向くとそこには髪の毛などが黒くなったテレツケンがいた。

「テレツケン！？」

「そうだよ。」

人目がつかないところに駆け込むと話し込んだ。

「なんでテレツケンがこっちに居るの！？」

「あの後、ストーリーがだいぶ変わってしまったようですね、僕は魔女にたのんで君の世界に贈ってもらったことになったんだ。本をみてごらん。」

手に持っていた本を開くと今までのお話とはだいぶ変わってしまった。

テレツケンは私が消えた後にさ迷い歩き、魔女にたのんで私の世界に来るといふ謎の終わり方で終わり、今ここに居るテレツケンには小枝木君の記憶もテレツケンの記憶もあるけど、元いた小枝木君はテレツケンの記憶がなく、今のテレツケンが前から居た小枝木君に入れ替わり、前に居た小枝木君はもといたテレツケンに入れ替わってしまったのだ。

それに私の名前まで出ていて幽霊部員にも関わらず主役は私しか居ないということになっていた。

「わけ………わかんない………無茶すぎだよ………
・・・テレツケン。」

「いいんだ、僕は君に会いたかったんだから。」

そう言ってテレツケンは微笑むと私の手をとって舞台へと出た。

舞台は大成を収め、第二話がやることに決まった。（その後はみんなの妄想編）

そうやって私たちの物語りは続いてく。

どうなるかは私たちにもわからない。

でも、楽しみだよ。

テレッケン、あなたがいるから……。

4*「テレッケン!？」（後書き）

ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8395i/>

物語と恋

2011年1月16日05時08分発行